

子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Infantile hemangioma and the risk factors in a Japanese population: A nationwide longitudinal study - The Japan Environment and Children's Study (JECS)

和文タイトル:

日本人における乳児血管腫の有病率とリスク因子に関する検討:子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)より

ユニットセンター(UC)等名: 富山ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Journal of Investigative Dermatology

年: 2021 DOI: 10.1016/j.jid.2021.05.011

筆頭著者名: 三澤 恵

所属 UC 名: 富山ユニットセンター

目的:

乳児血管腫は、いちご状血管腫とも呼ばれる乳児期に最も多くみられる良性血管腫瘍の一つで、海外の報告では有病率は乳児の約 4.5%とされており、女兒や低出生体重などいくつかの要因との関連が指摘されている。本研究では日本人における乳児血管腫の有病率と発症に関連する要因について調査した。

方法:

エコチル調査のデータのうち、1 歳時に子どもの保護者に行った質問票調査から、85,244 人分のデータを用いて分析した。乳児血管腫の有無は質問調査票に記載された情報から収集した。23 の共変量で調整し、多変量ロジスティック回帰分析でオッズ比を算出した。(オッズ比とはある疾患の生じやすさを他の群との比で表した値)

結果:

乳児血管腫を有する子どもは 613 例で有病率は 0.72%であり、過去の報告と同様に他国の有病率よりも低かった。母親の花粉症、生殖補助医療の実施にて有意なオッズ比の上昇が、男児、在胎週数で有意なオッズ比の低下が認められた。また、母親のアレルギー性結膜炎では統計学的に有意ではなかったが、オッズ比の上昇を示した。低出生体重では有意な関連は認められなかったが、在胎週数が 1 週間増える毎に乳児血管腫の有病率が約 9%低くなることが分かった。

考察(研究の限界を含める):

女兒、生殖補助医療の実施、在胎週数はこれまでも乳児血管腫との関連が報告されており、本研究の結果とも合致した。母親の花粉症・アレルギー性結膜炎は、本研究により新たに関連が示された因子である。本研究の限界点としては、自己申告による調査であり、単に「血管腫」と申告した対象者(約 0.3%)を除外していること、乳児血管腫の数と大きさに関するデータを収集していないこと、母親の花粉症・アレルギー性結膜炎の重症度・治療に関するデータを収集していないこと等が挙げられ、これらを考慮する必要がある。

結論:

日本人における乳児血管腫の有病率が 0.72%と他国に比べて低く、母親の花粉症・アレルギー性結膜炎、在胎週数、生殖補助医療の実施、女兒であることが、乳児血管腫の発症と関連する要因であることがわかった。